

# ドイツ緑の党の党内再編 原理派の影響力喪失とベルリンの壁崩壊の影響を中心に

Reorganisation der innerparteilichen Strömungen bei den GRÜNEN:  
Untergang der Fundamentalisten und Fall der Berliner Mauer

中 田 潤

## Abstract

Etwa zehn Jahre nach der Parteigründung hatte die Partei der Grünen vor allem bei den Wahlen zum Europäischen Parlament und den Kommunalwahlen nachhaltige Erfolge erzielt. Dennoch befand sich die Bundespartei in einer Selbstidentitätskrise und faktisch im Überlebenskampf. Obwohl die Notwendigkeit von Strukturreformen gemeinsam erkannt wurden, insbesondere innerhalb der Bundespartei, wurden diese nicht weiter verfolgt.

In den Jahren 1988 zwischen 1990 traten jedoch zwei Ereignisse ein, welche eine Parteistrukturereform vorantrieben. Das erste war, dass die sogenannten Fundamentalisten in der Parteizentrale ihren Einfluss verloren. Zum Zweiten hat das Parteienspektrum in der Bundesrepublik wegen der Wiedervereinigung Deutschlands insgesamt eine große Veränderung erfahren. In diesem Beitrag wurde der Prozess der Reorganisation bei den Grünen analysiert.

## はじめに

本稿では、1988年後半から、ドイツ統一後初の総選挙が行われた1990年12月初頭までの緑の党の再編のプロセスを扱う。大別するならば、二つの要因がこの時期の緑の党の党内再編に大きな影響を与えた。その一つは、長年にわたる党内対立において一方の軸を形成していた原理派<sup>1</sup>が、党中央レベルにおいて影響力を喪失したことであった。もう一つは、東側陣営における変化を受ける形で、ドイツ民主共和国においてもドイツ社会主義統一党 (SED) の支配体制が崩壊したことであった。この二つの要因が相互関連する形で発生してきた状況に対して、いかに対応していく

のかという点をめぐり、緑の党内の路線対立は急激にその性質を変化させていく。それは端的にいうならば、党は「社会的エコロジー政党」への道を進むのか、それとも「エコロジー的市民政党」へと方向転換していくべきか、という点をめぐる争いであった。

## 1. 原理派の影響力喪失による党内勢力配置の変化

### 1-1. カールスルーエ党大会 (1988年12月2/4日)

1980年1月に結成大会が開催されたカールスルーエにおいて、1988年12月2/4日に、

1 原理派については、以下を参照。中田潤「ドイツ緑の党の党内再編 左派フォーラムと出発派の動きを中心に」『茨城大学人文社会科学部紀要 社会科学論集』第2号 (2018年2月) 23-44頁。

緑の党のその後の方向性を再び大きく左右することになる臨時党大会が開催された。この大会では本来、来たるべきヨーロッパ議会選挙に向けた活動が主要議題となるはずであったが、バーデン・ヴュルテMBERG州支部の動議により、党の財政問題が議論されることになった<sup>2</sup>。激しい議論の後、同州党支部長で、現実派と見なされていたハイデ・リュール（Rühle, Heide）によって党中央執行部不信任案が提出され、これが214対186で可決された。この結果を受けてユッタ・ディトフルト（Ditfurth, Jutta）、クリスティアン・シュミット（Schmidt, Christian）らの原理派を中心とする党中央執行部は総辞職し、党中央委員会（Bundeshauptausschuß）が臨時に党中央執行部を代行することになった。中央委員会の長には、左派フォーラムのマリーナ・グロース（Groß, Marina）が就任した。12月11日に開催された中央委員会では、互選により臨時党中央執行部が選出され、レナーテ・ダムス（Damus, Renate）、ジークリッド・エンゲルブレヒト（Engelbrecht, Sigrid）、エルンスト・フステット（Hustädt, Ernst）、ジルケ・シュトルックマイヤー（Struckmeyer, Silke）、アクセル・フォージェル（Vogel, Axel）が就任した<sup>3</sup>。

この党執行部の解任劇は、緑の党内に走った激震として多くのメディアによって取り上げられた<sup>4</sup>。原理派の中心的人物であったディ

トフルトが1984年12月より4年に渡ってその地位にあったことが端的に示すように、党執行部は原理派の牙城の一つを形成していた。その原理派が突如としてその影響力を失った背景には、実は静かに進行していた党の構造転換の問題が関係していた。

## 1-2. 原理派の反撃：「連邦議会議員団は、自党の底辺をもはや代表していない」

党内の権力闘争において次第に劣勢になりつつあった原理派が、その反撃に際して駆使してくるロジックは、「底辺民主主義」であった。それが最も政治的に稚拙な形で露呈したのが、婚姻関係内における強姦罪の成立とその刑期に関する議論であった。1988年前半には、この問題に関して激しい議論が党内で戦わされ、その刑期に関して2年とする法案を連邦議会に提出することを党執行部は決定していたが、党連邦議員団はこれを拒否する。

これに対して原理派が優勢であった党執行部は、1988年5月27日付けフランクフルター・ルントシャウ紙に「我々は党の決議、そして女性の利害の軽視を甘受しない [...] 緑の党の連邦議会議員団は、自党の底辺をもはや代表していない」という意見広告を掲載する<sup>5</sup>。この問題は、本質的には女性の権利をめぐる重要な政治テーマであり、また先に挙げた命令委任という党運営の基本原則をめぐる論争

2 Volmer, Ludger: Die Grünen. Von der Protestbewegung zur etablierten Partei, München 2009, S. 289; Murphy, Detlef; Roth, Roland: „In (nicht mehr gar so) viele Richtungen zugleich DIE GRÜNEN. Ein Artefakt der Fünf-Prozent-Klausel?“, in: Roth, Roland/ Rucht, Dieter/ Bundeszentrale für politische Bildung (Hrsg.): Neue soziale Bewegungen in der Bundesrepublik Deutschland, Bonn 1991, S. 415-440, hier S. 431.

3 „Grüne Krise eskaliert. Bundesvorstand abgewählt“, in: tageszeitung vom 5.12.1988, S. 2（以下 taz と略す）；Liste Parteitage Die Grünen (1979-1993): www.boell.de/sites/default/files/uploads/2008/08/bdk\_1979-1993\_die\_gruenen.pdf.

4 „Grüne nach Sturz des Vorstands in der Krise. Flügelkämpfe durch Parteitag verschärft“, in: Frankfurter Rundschau vom 5.12.1988, S. 1f.; „Revolte der Basis“, in: Frankfurter Rundschau vom 5.12.1988, S. 3; „Nach der Abwahl des Bundesvorstandes verstärken sich die Flügelkämpfe bei den Grünen“, in: Süddeutsche Zeitung vom 5.12.1988, S. 1, 3, 4 und 6（以下 SZ と略す）。

でもあった。それゆえに党内の「この問題に関する見解の相違の分断線は、各派閥の分断線を横切っていた」<sup>6</sup>が、先鋭化した原理派・現実派の対立の状況の中では、いとも簡単に双方の派閥の権力闘争の道具に転化することになった<sup>7</sup>。

こうした方法による「意見表出」は、多くの党地方支部の強い批判を浴びることになる。バイエルン、ヘッセン、バーデン・ヴェルテムベルグそしてノルドライン・ヴェストファーレンの党支部は、抗議声明を発表し<sup>8</sup>、また出発派も派閥としてこの行動を批判していた<sup>9</sup>。原理派のこうした行動は、党内の混乱状況を社会的に印象づけ、緑の党の社会的な信頼を損なわせたとどまらず、自派の党内での影響力を失わせることになった。

それにさらに追い打ちをかけたのが、6月13日付けのシュピーゲル誌に掲載された党執

行部による「財政スキャンダル」を暴露する記事であった<sup>10</sup>。ボンの近郊ボルンハイムに党が所有する建物の修復に関する財務処理の「不明確さ」について報道したこの記事は、原理派が支配する党執行部への総攻撃の口実となった。その後党内に調査委員会が設置され、この問題は党内の一大争点となっていたが<sup>11</sup>、11月20日には「意見広告」に強く抗議していたバイエルン州党支部が、党中央執行部の辞任を要求し、ノルドライン・ヴェストファーレン支部も同様の決議を採択していた。現実派・出発派もこれに同調した<sup>12</sup>。

### 1-3. 左派フォーラムの動向

前述の党大会は、こうした状況下で開催された。現実派・出発派は、党の構造改革の障害であり続けている原理派の党執行部からの退場を望んでおり、前述のような「スキャン

5 „Die Grüne Bundestagsfraktion vertritt ihre Parteibasis nicht mehr!“, in: Frankfurter Rundschau vom 27.5.1988; „Grüner Bundesvorstand bleibt hart. Fraktion wird aufgefordert, Gesetzentwurf zu Vergewaltigung mit Zweijahres-Strafmaß einzubringen“, in: taz vom 31.5.1988, S. 2; Murphy: „In nicht mehr gar so viele Richtungen“, S. 430; Volmer: Die Grünen, S. 285.

6 Bieber, Horst: „Grüne gegen Grüne. Vorstand und Fraktion liegen sich erneut in den Haaren“, in: Die Zeit, 23/1988. この意見広告には、原理派のみならず、リュドガー・フォルマー、エリカ・トレンツラの穏健左派に属する連邦議会議員らも呼びかけ人に加わっていた。このことは、この問題が単なる原理派による現実派への攻撃に留まるものではなかったことを示している。またハンブルク、ベルリン、ザールラントの党支部と計9名の連邦議会議員が、この行動に支持を表明していた。

7 例えば党執行部決議に反する行動を正当化して、現実派は以下のような回答を行っていた。「緑の党の執行部の一部は、良く見積もっても党を笑いものにしようとしているし、最悪の場合、党を政治的に自死させようとしている。これは極めて憂慮すべきことであるが、残念ながら真実である」 Bieber: „Grüne gegen Grüne“.

8 Murphy: „In nicht mehr gar so viele Richtungen“, S. 430.

9 „Gefahr erkannt, Gefahr gebannt“. Erklärung der Gruppe „Aufbruch '88“ zur Grünen Krisenkonferenz am 3.6.1988 und zur Kontroverse um die Mindeststrafe für Vergewaltigung, o. D.: AGG, A-Nickels, Christa/113.

10 „Grüne/Finanzen. Einmalig schweinisch“, in: Der Spiegel, 24/1988, S. 47-52.

11 Bannas, Günter: „Haus Wittgenstein als Streitobjekt der Grünen“, in: Frankfurter Allgemeine Zeitung vom 5.10.1988, S. 4.(以下FAZと略す); Bannas, Günter: „Ein radikaler Verlust an Glaubwürdigkeit“, in: FAZ vom 17.10.1988, S. 4.

12 Wiedemann, Charlotte: „Grüner Bundesvorstand unter Druck“, in: taz vom 23.11.1988, S. 4.

ダル」を追求することで彼らの追い落としを画策する。しかしながら彼らは、党大会における代議員の多数を掌握できていなかったため、その実現には懐疑的であった。それゆえに、原理派解任を求める意思表示が実際に多数を占めたという状況は予想外であった。彼らが、原理派解任後の新執行部人事を事前に準備していなかったことは、こうした状況認識を物語っていた。現実派・出発派は、この事態に対応するために、党中央委員会が臨時に党中央執行部業務を代行することで、新人事の準備のための時間を稼ぐことで満足せざるを得なかった。その意味で、この大会は単純に現実派・出発派の勝利とは言えなかった<sup>13</sup>。

この解任劇に決定的な役割を果たしたのは、実は左派フォーラムであった。左派フォーラムは、ハンブルクを主たる拠点とする原理派に代わり党内における左派的立場を代表することを目指して、1988年6月に穏健左派勢力を中心に結成された派閥であった。1988年11月5日にベルリンで約150人の参加者からなる最初の本格的な会合を開催した後<sup>14</sup>、地方支部レベルでの組織作りも積極的に進め、ノルドライン・ヴェストファーレン、バーデン・

ヴュルテムベルク、ニーダーザクセン、バイエルン、ベルリン、ハンブルク州支部内に、組織を立ち上げていた<sup>15</sup>。彼らの一部が、原理派中心の執行部に対する不信任案賛成にまわったことが、この投票結果につながっていた<sup>16</sup>。

この時左派フォーラムが意図していたのは、党内において原理派とは異なる形で左派的立場を主張することであった。それはより具体的に言うならば、議会内での連立についての考え方の相違であり、また党を支持する一般の有権者との向き合い方の相違であった。左派フォーラムは、カールスルーエの党大会について以下のような12月5日にプレス発表を行っていたが、これは左派フォーラムの自己理解および原理派を含めた全ての派閥との関係を、極めて明確に表現していた。そこでやや長くなるが引用しておきたい。

今後原理派が、エコリパタリアンや社会民主主義的な現実派によって党から追放されるといった事態が生じない限り、非教条主義的左翼にとって、ラディカル・エコロジストならびにエコ社会主義者との連帯は

13 „Grüne nach Sturz des Vorstandes in der Krise. Flügelkämpfe durch Parteitag verschärft“, in: Frankfurter Rundschau vom 5.12.1988, S. 1f. 『フランクフルター・ルントschau』紙は、この解任劇における左派フォーラムの存在を全く意識しておらず、党底辺の動きの結果としか報じていない。„Revolte der Basis“, in: Frankfurter Rundschau vom 5.12.1988, S. 3; „Nach der Abwahl des Bundesvorstandes verstärken sich die Flügelkämpfe bei den Grünen“, in: SZ vom 5.12.1988, S. 1, 3f. und 6. また『南ドイツ新聞』も予想外の展開という点のみを強調し、左派フォーラムについての言及はない。

14 „Vorschlag zum Ost-West-Dialog und für einen 2. Perspektivenkongreß“, in: taz vom 7.11.1988; Einladung zur Fortsetzung des Linkes-Forums auf dem Perspektivenkongreß „Zeit zum Nahdenken. Arbeitstagung am 5. und 6.11.1988 in West-Berlin“, Mitte September 1988: AGG, A-Bannas, Günter/10.

15 Pressemitteilung Nr. 1212/88 vom 5.12.1988: AGG, A-Bannas, Günter/10.

16 Bannas, Günter: „Zwischen Radikalität und Kompromiß“, in: FAZ vom 10.2.1989, S. 12. 出発派・現実派の支持者の大部分が執行部不信任案に賛成票を投じたのに対して、左派フォーラムの大部分は、反対票を投じているという点に注意する必要がある。このことは実は、それぞれの派閥の指導部の方針が代議員レベルで貫徹している訳ではないことを意味している。それは、前述した党の寡頭支配が、状況によっては突如として流動化する可能性を示している。

当然のことである。しかしながら保守的な多数派に対抗する自称「統一左派」は党内に存在しないし、また今後成立することもない。非教条主義的左翼の目標は、独自の左派政治を展開することであって、無分別に左派統一を糾合することではない。左派フォーラムとしての〔原理派からの：筆者〕決別は、空想的ではない現実的で非原理主義的な左派を緑の党内で、そして党のために発展させるといった目的でなされた。こうした選択肢を妨げるのは、カールスルーエの多数派が、戦術的な観点から中間派・現実派同盟として固定化することによってである〔…〕もし現実派が非教条主義的左翼を自らの政治構想の中に取り込み、いわゆる原理的反対派を分裂させることが出来ると考えるならば、それは見込み違いである。非教条主義的左翼は、新たな現実的な左派の展望を党内に根付かせるために、左派の古い統一を断念する用意がある。しかしながらそれは原則としての〔原理派との：筆者〕連帯の否定を意味しない。我々にとって左派内部の連帯は、緑の党の社会民主化のプロセスにおける「左派的イチジクの葉」になることよりも重要である<sup>17</sup>。

この声明の中で、左派フォーラムは翌年1月に開催される<sup>18</sup> 原理派を含めた党内全左派の会合への参加を表明し、原理派との全面的な断絶は意図していないものの、もはや彼ら

との共同歩調も念頭にないことを断言していた<sup>19</sup>。また2月19日に開催されたデュイスブルク党大会に向けた左派フォーラムの会合の席上、原理派の解任決議を緑の党における「歴史的な一歩」と評価とするが、それは「左派的立場の放棄や構造的保守派への転向」ではなく、今後も「急進エコ社会主義的・フェミニズム的な党の立場」を擁護していくことを確認していた<sup>20</sup>。

しかしこうした左派フォーラムの声明にもかかわらず、2月4/5日にボンで開催された左派系党員の会合の場は、もはや左派の再結末の場、さらには巻き返しのための準備の場とはならなかった。ライナー・トランペルト(Trampert, Rainer)の党執行部への立候補が議題となるが、本人を含めた原理派内でも、カールスルーエ党大会での敗北を再確認することになるという懸念から、これを思い留まるべきという意見が大勢であった。ディトフルトのみが、立候補して巻き返しを図ることが一般党員に対する責任であると述べるが、それに呼応する意見はほとんど出されなかった<sup>21</sup>。また左派フォーラムのハラルド・ヴォルフ(Wolf, Harald)は、出発派からの立候補者がラルフ・フックス(Fücks, Ralf)であるという前提の上で、トランペルトかフックスのどちらかの選択は「ペストかコレラを選択しろというのに等しい」とさえ発言して、左派陣営内の亀裂の深さを示した<sup>22</sup>。

さらにこの会議では、左派陣営内部でヘゲ

17 Pressemitteilung Nr. 1212/88 vom 5.12.1988. Zum Ausgang der Bundesdelegiertenkonferenz erklärt Ludger Volmer auf dem Hintergrund der Diskussionen der „Undogmatischen Linken“: AGG, A-Bannas, Günter/10.

18 実際で開催されたのは2月4日であった。

19 Pressemitteilung Nr. 1212/88 vom 5.12.1988: AGG, A-Bannas, Günter/10.

20 Mit rot-grün vertiefen die Brüche im herrschenden Konsens (19.2.1989): AGG, A-Bannas, Günter/25; Presseerklärung vom 22.2.1989: Linkes Forum: Für Rot-Grüne Zusammenarbeit in Berlin: A-Bannas, Günter/10.

21 Olms, Ellen: „Grüner Trauerspiel“, in: Grünen vom 12.12.1988, S. 7: AGG, A-Krieger, Verena/20; Bannas, Günter: „Zwischen Prinzip und Machtstreben“, in: FAZ vom 26.9.1986, S. 12.

22 Wiedemann, Charlotte: „Ranglistenturnier der grünen Linken“ in: taz vom 3.2.1989, S. 5.

モニーを握った左派フォーラムがベルリンでの連立交渉の進展に触れながら党内での新たな左派政治の展望について議論する一方で、原理派は、党外の左派勢力との連携のあり方、つまり緑の党からの離脱の可能性について言及していた。また両勢力とも、すでにそれぞれ独自の会合を準備していることを明らかにしていた<sup>23</sup>。

#### 1-4. デュイスブルク党大会（1989年3月3/5日）

カールスルーエ党大会での原理派の敗北の後、その代表的人物であったトーマス・エーバーマン (Ebermann, Thomas) は「現存の体制に対する拒否勢力としての緑の党」という立場を強調することによって、原理派の旧来の強硬路線へと回帰していった。しかしながらこうした路線は、ベルリンでの連立政権成立で示されたように、自らの「統治能力 (politikfähig)」を示すために政権参画を「もはやタブー視しない」立場が、左派を含めて多数派となった党内において、原理派の孤立

の度合いを深めるだけであった<sup>24</sup>。

1989年3月3日に第11回の党大会がデュイスブルクで開催されるが、もはや左派原理派が党執行部に返り咲くことはなかった。ここで党執行部に選出されたのは、フックス (出発派)、ハマーバッハー (現実派)、ヴェレーナ・クリーガー (Krieger, Verena) (左派フェミニスト/左派フォーラムに近い立場をとる) (以上党代表)、ダームス (書記)、フォーゲル (会計) であった。左派フォーラム (左派フェミニストを含む) が最大多数派となったこの党大会で、彼らはユルゲン・レーンツ (Reents, Jürgen)、ベニータ・シュルツ (Schulz, Benita)、ユルゲン・マイアー (Jürgen Maier) を執行部役員として送り出し、またフックスとクリーガーを支持した。その意味で新執行部は現実派、出発派、左派フォーラムの協力体制として成立したと言えた<sup>25</sup>。

#### 1-5. 西ベルリンでの連立政権の成立

原理派が党外での活動の可能性を模索する一方で、左派フォーラムにとって、この時期

23 Wiedemann, Charlotte: „Grüne SozialistInnen zaudern vor Ausbruch '89“, in: taz vom 7.2.1989, S. 5.すでに任期を終え再選が不可であったディトフルト, ミヒャリク (Michalik, Regina) とともにトランペルトも結局立候補を断念した。„Eine Zäsur?“, in: taz vom 7.2.1989, S. 4.

24 Nowakowski, Gerd: „Aus Angst vor dem Tod Selbstmord begehen?“, in: taz vom 1.3.1989, S. 10.これはデュイスブルク党大会に向けたフックス、エーバーマンそしてハマーバッハー (Hammerbacher, Ruth) の対談記事である。

25 Nowakowski, Gerd: „Grüner Neuanfang mit Strömungsproporz. Bundesversammlung der Grünen in Duisburg wählt neuen Vorstand“, in: taz vom 6.3.1989, S. 1; Volmer, Ludger: „Signal-betr.: Zwischen Aufbruch und Verbitterung. Grüner Neuanfang mit Strömungsproporz“, taz vom 6.3.89“, in: taz vom 13.3.1989, S. 16; Volmer: Die Grünen, S. 290; Murphy: „In nicht mehr gar so viele Richtungen“, S. 432. Murphyはこの党大会によって、党中央における原理派から中間派への主導権の移行は完結したと考えている。ただしこの時点で原理派が完全に影響力を失ったとは言えなかった。例えば1989年1月29日に行われた連邦議員団代表選では、原理派フェミニストのユッタ・エステルレ=シュヴェリー (Oesterle-Schwerin, Jutta) が、ヘルムート・リップペルト (Lippert, Helmut)、出発派のアンティエ・フォルマー (Vollmer, Antje) と並んでなお選出されていた。またリップペルトの選出は、現実派のオットー・シリー (Schliy, Otto) の選出を防ぐために左派フォーラムが彼を支持した結果であった。左派フォーラム内での現実派に対する反発は、原理派に対する距離感に勝るものであった。

の最大の関心事はベルリンでの州議会選挙であった。1989年1月29日に行われた州議会選挙において、ベルリンのオルタナティブ・リスト（AL）は11.8%（+1.2%）の得票率で17議席を獲得していた<sup>26</sup>。同じく議席を伸ばした社会民主党にとって、このオルタナティブ・リストとの連立が実現すれば、過半数を背景にした政権運営が可能になる状況が出現していた。

選挙での勝利の高揚感も醒めやらぬ2月11日に、ベルリンALの党員総会でこの問題が話し合われたが、左派を含めた多数が連立交渉の開始を望んでいた。こうした大勢の中でベルリンでは「原理派は沈黙を強いられ」<sup>27</sup>、結局圧倒的多数（99.8%）の賛成で社会民主党と連立交渉に入ることが決定された<sup>28</sup>。

これに対して2月18日にボンで開催された左派フォーラムの会合では、すでに始まっていた社会民主党との交渉状況も影響して、ベルリンでの連立に否定的な意見が多数を占めた。ベルリンALのメンバーであり連立交

渉にも参加していたヴォルフも、連立への参画ではなく、社会民主党少数政権への閣外協力で派内をまとめることに尽力していた<sup>29</sup>。またL. フォルマーもターゲスツァイトゥング紙のインタビューの中で、交渉の主導権はベルリンのALが握っているという前提で、左派フォーラムとしては閣外協力で賛成であることを表明していた<sup>30</sup>。

しかしながらこうした左派フォーラムの意向に反して、3月7日に社会民主党とベルリンALとの連立政権樹立の合意が発表される<sup>31</sup>。3月11日に行われたALの党員投票でも連立支持が80%を占め、ドイツで二度目となる緑の党が参加する政権が、西ベルリンにおいて発足することになった。党員投票に際して左派フォーラムのヴォルフやビルギット・アルケンシュテッテ（Arkenstette, Birgit）は、連立ではなく閣外協力を求める動議を提案したが、否決された<sup>32</sup>。

こうした経緯に注目する時、左派フォーラムの影響が比較的強いと思われていたベルリ

26 「民主主義と環境保護のためのオルタナティブ・リスト（Alternative Liste für Demokratie und Umweltschutz: AL）」は1978年に社会主義者、毛沢東主義者、フェミニスト、平和主義者などが結集して西ベルリンで成立した政党であった。緑の党が全国政党として結成された際に、その政策的な親近性から合流を決定する。それによりこの政党は、緑の党の西ベルリン州支部という位置づけを受け入れていたが、ALという政党名を維持しづけることをその条件としていた。Bühnemann, Michael u.a. (Hg.): Alternative Liste für Demokratie und Umweltschutz: AL. Die Alternative Liste Berlin. Entstehung, Entwicklung, Positionen, Berlin 1984.

27 „Die Alternative Liste zwischen Sekt und Selters“, in: taz vom 11.2.1989, S. 31.

28 Heinrich, Gudrun: „Rot-Grün in Berlin 1989-1990“, in: Raschke, Joachim: Die Grünen. Wie sie wurden, was sie sind, Köln 1993, S. 809-822, hier S. 811.

29 Presseerklärung vom 22.2.1989: Linkes Forum: Für Rot-Grüne Zusammenarbeit in Berlin: AGG, A-Bannas, Günter/10; Wolf, Frieder Otto: Vorschlag für ein Papier zur Selbstverständigung des „Linken Forums“ über die gegenwärtige Lage der Grünen im Februar 1989: AGG, A-Raschke, Joachim/87; Nowakowski, Gerd: „Die Koalition wird ein Desaster“, in: taz vom 20.2.1989, S. 4.

30 „Man muß strategische Optionen im Kopf haben“, in: taz vom 23.2.1989, S. 24.

31 Fehrle, Brigitte, „Rot-Grün wagt die Vernunft“, in: taz vom 7.3.1989, S. 1 und 2.

32 Heinrich, Gudrun: Rot-Grün in Berlin. Die Alternative Liste in der Regierungsverantwortung 1989-1990, Marburg 1993, S. 36f.

ンのALにおいてでさえ、党基礎のレベルでは左派フォーラムの方針が単純に貫徹している訳ではないことがわかる。しかしながら党中央レベルの派閥対立という観点から見れば、左派フォーラムの影響力が強いベルリンにおいて連立政権が成立したことは、彼らの優位を強めることになった。

またハンブルクを中心とする原理派の凋落により、ディトフルト、エーバーマンといったカリスマ性を持った派閥の顔を左派は失っていたが、このベルリンにおける連立政権成立のプロセスにおいて左派一般党員は新たなカリスマを見いだす。それがクリスチャン・シュトレベレ (Ströbele, Christian) であった。ベルリンの連立交渉の立役者となったこの人物が持つ、連立路線を主張しつつも急進左派的で、さらに柔軟な交渉スタイルは、左派一般党員が求めるカリスマにまさに適合するものであった。彼の急激な台頭は、こうした一般党員のカリスマを求める意識から説明される<sup>33</sup>。

#### 1-6. 現実派・出発派連合の攻勢

デュイスブルク党大会では、原理派の凋落を受けて、現実派、出発派、左派フォーラム間の協力体制が成立したようにみえた。しかし後の視点から見れば、デュイスブルク党大会は、現実派・出発派が左派フォーラムと平和共存を目指した最後の瞬間となった。すでにカールスルーエ党大会以前より、左派フォーラムが党内における一大派閥へと成長していくことに対して、現実派・出発派は危

機感を強めていた。1988年11月6日に現実派は全国レベルでの会合を開催し、そこで出発派によるmanifestoの党員投票キャンペーンに同調することを決議すると同時に、12月の党大会に向けて出発派に同盟を呼びかけていた<sup>34</sup>。出発派がこの申し出を受けることにより、両者は急速に接近していった<sup>35</sup>。出発派は、派閥としての発足時点では左派的な自己理解を示していたが、左派フォーラムへの攻撃を強める過程で次第にこうした立場を放棄し、エコリバタリアン的な立場に傾倒していく<sup>36</sup>。その意味で、原理派の影響力の喪失とデュイスブルク党大会によって、党内融和が進展した訳ではなかった。

#### 1-7. 「社会的エコロジー政党」から「エコロジー的市民政党」へ?

緑の党は1980年の結党以来、綱領レベル(ザールブリュッケン綱領)では自らを「社会的エコロジー政党」と定義してきた。その後の党内対立に翻弄され、こうした自己定義の枠から大きく外れる個々の議員の発言や行動が繰り返されてきたとしてもある。

しかしながらデュイスブルク党大会で、原理派の影響力の排除に成功した現実派と出発派は、それにとどまらずこの緑の党の自己定義そのものの変更に着手する。緑の党は、今や党内紛争の時期から脱却して、「政治的方針決定の時期」(ハマーバッハー)にある、あるいは「第二の創設期のための新たなアイデンティティ」構築が求められていると説きながら<sup>37</sup>、彼らが目指したのは、緑の党をエコ

33 Bannas, Günter: „Noch einmal liest Jutta Ditfurth dem Parteitag die Leviten“, in: FAZ vom 6.3.1989, S. 3; Nowakowski, Gerd: „Ideeller Gesamtgrüner auf Touren“, in: taz vom 17.11.1990, S. 7.

34 „Realo-Aufbruch“, in: taz vom 8.11.1988, S. 2; Murphy: „In nicht mehr gar so viele Richtungen“, S. 431; Volmer: Die Grünen, S. 288.

35 Hoffmann, Jürgen: Die doppelte Vereinigung. Vorgeschichte, Verlauf und Auswirkungen des Zusammenschlusses von Grünen und Bündnis 90, Opladen 1998, S. 82.

36 Hoffmann: Die doppelte Vereinigung, S. 83.



ロジー的「市民政党」へと方向転換させることであった。それは1980年に党から離脱していったヘルベルト・グルール (Gruhl, Herbert) やバルドゥール・シュプリングマン (Springmann, Baldur) などの価値保守主義者が目指していた路線への部分的な回帰という性格を持つものであった<sup>38</sup>。

その最初のシグナルは、1989年6月18日のヨーロッパ議会選挙投票日の夜になされた現実派のハマーバッハーの発言であった。この選挙で緑の党は得票率8.4%を獲得し、勝利に沸く中で彼女は連邦レベルでの自由民主党を含めた「信号連立」の可能性について言及する<sup>39</sup>。前述のように3月に西ベルリンで緑の党と社会民主党の連立政権が成立しており<sup>40</sup>、1990年の選挙結果如何では、社会民主党と緑の党との連立政権が連邦レベルで成立する可能性もあった。それを視野に入れた社

会民主党との接触が、この時期現実派に限らず様々なルートで始められていたが<sup>41</sup>、まさにこの時期に現実派が自由民主党との連立について言及したことは、左派フォーラムには驚きであった<sup>42</sup>。

この発言は単なる彼らの願望の次元にとどまるものではなく、現実派・出発派連合は、その実現に向けた党内環境の整備に積極的に乗り出す。例えば出発派は10月23日に自派の会合を開催していたが、その際にハネローレ・ザイボルト (Saibold, Hannelore) が作成した「エコロジー政策は、そろそろ貫徹できるものにならない」と題した文書が配布されていた。そこには環境政策の優位を再び前面に打ち出すことによって、緑の党の新たなアイデンティティを作り上げるという構想が述べられていた<sup>43</sup>。

さらに1990年1月16日の連邦議員団代表

37 Nowakowski, Gerd: „Von Spaltung spricht keiner bei den Grünen“, in: taz vom 29.3.1990, S. 6. またこうした方向性は、フランス緑の党が採用していたものでもあった。

38 グルール、シュプリングマンについては、以下の拙稿を参照。中田潤「新しい社会運動における価値保守主義：H. グルールとB. シュプリングマンを題材に (1)」『茨城大学人文学部紀要 社会科学論集』第59号 (2015年2月) 35-56頁。

39 Bannas, Günter: „Das Ziel: der Kabinetttisch“, in: FAZ vom 4.7.1989, S. 10; Volmer: Die Grünen, S. 290.

40 西ベルリンでの赤緑政権については以下を参照。Reinecke, Stefan: Ströbele. Die Biografie, München/Berlin 2016, S. 323-326.

41 例えばこの時期の社会民主党と緑の党の接触についての以下の記事を参照。„Abschied von politischen Illusionen“, in: Der Spiegel, 30/1989, S. 16-18. また左派フォーラムと社会民主党左派との継続的な接触に関しては以下を参照。„Hauff bricht das Schweigen über den SPD-Kanzlerkandidaten“, in: FAZ vom 1.8.1989, S. 1f.; Bannas, Günter: „Linke aus SPD und Grünen setzen Gespräche fort“, in: FAZ vom 19.9.1989, S. 4; Wiedemann, Charlotte: „Strömungsübergreifend für rot-grün“, in: taz vom 1.8.1989, S. 4. 他の派閥と比較して出発派は社会民主党との交渉に消極的であった。これについては以下を参照。„Vollmer zu Rot-Grün“, in: taz vom 3.8.1989, S. 4.

42 „Lambsdorff Parteien sollen innere Strukturen ändern“, in: FAZ vom 31.7.1989, S. 5. 左派フォーラムは社会民主党左派との会談の席上、明確に自由民主党との連立については拒否の姿勢を示していた。„Hauff bricht das Schweigen über den SPD-Kanzlerkandidaten“, in: FAZ vom 1.8.1989, S. 1f. 左派フォーラムは、自らの連立に対する姿勢は、社会民主党の本質を「暴露」というハンブルクの原理派とは根本的に異なることを強調していた。Presseerklärung des Linkes Forums vom 22.2.1989: AGG, A-Bannas, Günter/25.

43 Grüer Aufbruch. Einladung zu unserem nächsten Jour-fixe am 23.10.1989 vom 20.10.1989: AGG, B.II.1/2265.

選で A. フォルマー、ヴァルトラウト・ショッペ (Schoppe, Waltraud)、ヴィリー・ホス (Hoss, Willi) を選出することによって現実派と出発派が議員団執行部を独占した後<sup>44</sup>、彼らによって「緑の円卓会議 (Grüne Runde)」と題した「和解と今後の党の展望」を議論するための「党派を超えた」会合の開催が呼びかけられた。そこに 36 名の党員が招待されたが、左派フォーラムに所属する人物は一人も含まれていなかった<sup>45</sup>。この左派フォーラムを排除した形で進められた議論の中で、現実派・出発派は、1990 年の連邦議会選挙に向けた選挙プログラム案「エコロジー・マニフェスト (Ökologisches Manifest)」を作成し、3 月 30 日から 4 月 1 日にかけて開催される予定であったハーゲン党大会でその採択を目指す。

エコロジーという緑の党内の共通原則を謳った一見無害に見えるこのマニフェスト案は、実はこれまでの緑の党の原則に大きな変更を迫るものであった<sup>46</sup>。ここで強調されているのは、緑の党の共通原則としてのエコロジーではなく、「社会的、ないしは連帯」という左派が強調してきた基本的な価値に対する「環境政策の優位」という側面であった<sup>47</sup>。「緑の円卓会議」が提起した「今後の党の展望」とは、左派フォーラムに結集した党内左派勢

力の一掃であった。こうした姿勢は主として出発派の主導によるものであったが、その背景には、党から左派的な色彩を取り去る一方で、この時期視野に入ってきたドイツの再統一を念頭におきながら、東ドイツ内で展開する人権運動勢力を緑の党に合流させることで、緑の党を「エコロジー的市民政党」へと方向転換させるという狙いがあった<sup>48</sup>。

## 2. ドイツ再統一をめぐる議論の中での緑の党

### 2-1. ベルリンの壁の崩壊

ハーゲン党大会は、「環境政策の優位」を掲げる現実派・出発派連合と左派フォーラムとの決戦の場となるはずであった<sup>49</sup>。本来党内融和を目指して旗揚げした新派閥を加えた形で、結果的にさらなる泥沼化の様相を呈していた党内状況であったが、こうした派閥闘争のそのその立脚点を揺るがす出来事がこの間に発生していた。1989 年 11 月 9 日のベルリンの壁の崩壊とその後の民主共和国におけるドイツ社会主義統一党 (Sozialistische Einheitspartei Deutschlands: SED) 体制の崩壊である。SED 体制の崩壊は、1990 年の連邦

44 Volmer: Die Grünen, S. 292.

45 Volmer はこの時点で、現実派・出発派連合が主たる敵として設定しているのはもはや原理派ではなく、左派フォーラムであることを認識したという。Volmer: Die Grünen, S. 292; „Die Frage wird heißen: Welche Vereinigung. Interview mit Joschka Fischer“, in: SZ vom 24.2.1990; Nowakowski, Gerd: „Alter Trott - neuer Tritt“, in: taz vom 15.02.1990, S. 2.

46 Hoffmann: Die doppelte Vereinigung, S. 82; „Zerstritten gehen die Grünen in die Wahlkämpfe dieses Jahres“, in: FAZ vom 2.4.1990; „Vertreter der ‚Realos‘ erwägen Spaltung der Grünen“, in: SZ vom 2.4.1990, S.2; „Einigkeit im Vorfeld der Spaltung“, in: SZ vom 2.4.1990, S. 4.

47 Volmer: Die Grünen, S. 292.

48 Nowakowski, Gerd: „Grüner Aufbruch - Im Parteiapparat versandet?“, in: taz vom 26.11.1990, S. 5; Hoffmann: Die doppelte Vereinigung, S. 83; Wick, Regina: Die Mauer muss weg - die DDR soll bleiben. Die Deutschlandpolitik der Grünen von 1979 bis 1990, Stuttgart 2012, S. 274.

49 „Grüne: Völlig irre“, in: Der Spiegel, 16/1990, S. 41-47.

議会選挙におけるドイツの再統一（＝二国家体制）問題という最大の争点を生み出すことになった。

緑の党はある意味で、ボン民主主義の最大の申し子といえる存在であった。彼らによるボン体制批判は、ボン民主主義の存在を自明な前提とした上で、それをより高い次元に引き上げることを目指していた。またその目標の実現にとって、ドイツ・ナショナリズムという情念は不要であり、彼らにとってそれは疎遠なものでさえあった。むしろハーバーマスが唱える「基本法ナショナリズム」こそが、1980年代末の緑の党のアイデンティティの一つであった。彼らはそれを意識的に議論することは好まなかったが、党の存在は連邦共和国の存在と一体化していたとさえ言えた<sup>50</sup>。それゆえに、党は冷戦体制内で自らが進むべき道については熱心に議論を重ねてきたものの、いわゆるドイツ問題について議論することには、結党期の一時期を除き消極的であった。それは現状の追認、つまり二国家体制および民主共和国の承認<sup>51</sup>が党の基本方針であることを意味した<sup>52</sup>。それゆえにベルリンの壁の崩壊直後の11月14日、党執行部は「ドイツによって引き起こされた第二次世界大戦の帰結として生じた」二国家体制を承認する

決議さえ行っていた<sup>53</sup>。またヨシュカ・フィッシャー（Fischer, Joschka）も11月中旬に発表された現実派の方針を表明する文書の中で明確に「統一については忘れよう」と呼びかけていた<sup>54</sup>。

その間に急激にSED体制の不安定化は進行し、その結果視野に入ってくるようになったドイツの再統一の可能性に刺激され、連邦共和国国内で急激にナショナリズム感情が高揚していた。しかしながら緑の党は、こうしたナショナリズム感情のうねりに自己同一化するには、あまりに理性的かつ自己抑制的であった。11月17/19日にザールブリュッケンにおいて東ドイツの市民権運動家を招聘して開催された党将来構想会議（Perspektivenkongreß）では、「東ドイツをボン基本法23条<sup>55</sup>に基づき連邦共和国に吸収するべきではない」という決議が採択されていた。後述するハーゲン党大会で採用されたスローガンは、「Kein Anschluss unter dieser Nummer!」であった<sup>56</sup>。緑の党にとって「重要なのは再統一ではなく民主主義」であった<sup>57</sup>。

しかしながら12月に入ると二国家体制維持の主張は、派閥を超えた共通の傾向としてトーンダウンし始める<sup>58</sup>。さらに1990年1月から2月にかけて、党は東ドイツ住民の圧倒

50 こうした議論については、以下を参照。中田潤「ドイツ連邦共和国における戦後システムと歴史認識 自由主義コンセンサスとポストフォーディズム」『年報・日本現代史20 戦後システムの転形』2015、163-199頁。

51 「SED独裁体制」という現状を承認するという意味ではなかった。

52 厳密に言うならば、党内での影響力は極めて小さかったものの、あくまで東側国家の自発性に基礎として非同盟中立のドイツ統一国家の実現を求める潮流も党内には存在し続けていた。いわゆる「ドイツ問題」をめぐる緑の党内の議論については以下の文献を参照。Wick: Die Mauer muss weg.

53 Volmer: Die Grünen, S. 293.

54 Wick: Die Mauer muss weg, S. 269.

55 ボン基本法23条の条文は以下の通り。1) Dieses Grundgesetz gilt zunächst im Gebiete der Länder Baden, Bayern, Bremen, Groß-Berlin, Hamburg, Hessen, Niedersachsen, Nordrhein-Westfalen, Rheinland-Pfalz, Schleswig-Holstein, Württemberg-Baden und Württemberg-Hohenzollern. 2) In anderen Teilen Deutschlands ist es nach deren Beitritt in Kraft zu setzen. ただしドイツ統一後、23条は新たな条文に差し替えられた。

的多数の意思が東西ドイツの統一にあること、そして西側の既成政党が、統一に向けて積極的に東ドイツ国内の政治的展開に介入している事実を認識するに至る<sup>59</sup>。そこで、2月5日にベルリンALの執行部ならびに連邦議会議員の一部も参加する形で党執行部の拡大会議が開催され、二国家体制と統一に関する党の正式の立場を議論するために、20日に党執行部・連邦議会議員団共同の会合を開催することが決定された<sup>60</sup>。

統一をめぐる国内の議論において緑の党の存在が埋没しつつあることに危機感を抱いていたフィッシャーを中心とする現実派にとって、こうした党内の議論のテンポは、あまりに悠長なものであった。それゆえにその翌日(6日)、現実派を中心とする連邦議会議員による会合が開かれ、「1989年11月9日以降の急激な事態の展開によって、緑の党がこれ

まで主張してきた二国家体制論に固執し続ける基礎が失われた」ことを確認した上で、党として東ドイツの西ドイツへの吸収合併には反対するが、それに代わり「条約によって保証された二つのドイツ国家の協力」によって成り立つであろう「エコロジー的国家連合(ökologische Konföderation)」を提案することを決議した。連邦議会議員の約半数のみによってなされたこの決議は、翌7日に緑の党連邦議員団の見解としてプレス発表された<sup>61</sup>。

党執行部およびベルリンALは、プレス発表を通してこの事実を知ることになる。とりわけ2月5日の決定を前提に、東側の市民運動や新たに結成されていた東側の緑の党と共闘の条件について交渉中であったあった党代表のフックスは、交渉における前提そのものを掘り崩すことになるこうした現実派連邦議会議員の独走に対して激しく反発する<sup>62</sup>。党

56 当時の西ドイツでは、無効な番号に電話すると „Kein Anschluss unter dieser Nummer!“ (この番号では接続できません) というメッセージが流れた。このドイツ語は「この(基本法の)条項での合併はない」とも解釈できるので、それを振ったわけである。„Resolution und Unterschriftensammlung. Kein Anschluss unter dieser Nummer“, in: Grüner Basis-Dienst: Sondernummer Bundesversammlung Hagen, 3/1990, S. 11; Wick, Die Mauer muss weg, S. 280.

57 Volmer: Die Grünen S. 293.

58 Nowakowski, Gerd: „Zukunft gestalten, nicht vereinnahmen“, in: taz vom 15.12.1989, S. 9.

59 Fischer, Vanessa: „Wir sind ein Volk. Die Geschichte eines deutschen Rufes“, [http://www.deutschlandfunkkultur.de/wir-sind-ein-volk.1001.de.html?dram:article\\_id=155887](http://www.deutschlandfunkkultur.de/wir-sind-ein-volk.1001.de.html?dram:article_id=155887). フィッシャーは、自らの情勢判断が決定的に誤っていたことをこの時期に認識したと回想していた。Wick: Die Mauer muss weg, S. 272 und 275-277; „Fischer: Müssen deutsche Einheit akzeptieren“, in: Frankfurter Rundschau vom 7.2.1990. この記事の中でフィッシャーは、ドイツ統一はおそらく避けられないが、それに伴う急激な社会変化を考えたとき、国家連合がベターだという認識を述べている。

60 Maier, Jürgen: Grünes Chaos in der Deutschlandpolitik vom 8.2.1990: AGG, B.II.1/2325.

61 Die Grünen im Bundestag, Thesen zur Deutschlandpolitik vom 7.2.1990: AGG, B.II.1/2325; Kommission für Geschichte des Parlamentarismus und der politischen Parteien, Heinrich-Böll-Stiftung, Archiv der Grünen Gedächtnis: Die Grünen im Bundestag. Sitzungsprotokolle und Anlagen 1987-1990. 2. Halbband Januar 1989 bis November 1990 (= Quellen zur Geschichte des Parlamentarismus und der politischen Parteien Deutschland seit 1945), Düsseldorf 2015, S. 870-879. 当日の議論に参加した数少ない連邦議員の中でも、とりわけ「二国家体制論に固執し続ける基礎が失われた」という前文については批判が集中し、結局賛成11票、反対6票、保留4票の僅差で可決されていた。„Grüne legen Zweistaatlichkeits-Dogma ab“, in: FAZ vom 7.2.1990.

代表の一人であり、左派フォーラムに属していたクリーガーは、8日プレス発表を行い、その中で「こうした重大な政治的立場の変更は、党大会において決定すべきである」と述べることによって、7日の連邦議員団の声明を公式に否定した<sup>63</sup>。こうした緑の党の対応は、ドイツ再統一をめぐる党内の架橋しがたい深刻な意見対立を党内外にさらけ出すことになった。

しかしながらこの左派の側からの批判は、ナショナリズムの高揚感の中で多くの人々が直視しようとしなかった、統一後のドイツ社会が抱えることになる諸問題を先取りし、またそれへの対応策も提起していた。クリーガーの主張に耳を傾けてみる。彼女は、既成政党がドイツ統一に向けて雪崩を打って動き始めていたこの時期に「すでに発車している電車に飛び乗ったとしても、その進行方向に影響を与えることはできない」という事実を見落としているとして、現状の追認によって影響力を確保しようとする現実派の行動様式を批判する。彼女も、東ドイツの住民の大部分が西ドイツへの吸収合併を望む中、その実現はもはや避けられないという認識を示しつつも、「西ドイツが現在抱えている社会・環境問題は、統一によっても、何一つ解決しない」という事実を想起すべきことを強調す

る。それゆえに党として重要なのは、統一に反対する立場をとりつつも、統一が実現した後必要となる政策を緑の党の視点から準備しておくこととする。「今日のナイーブな高揚感が、統一が実現した後に、山積する問題に直面することによって激しい幻滅感に転化することが予想される」。そうした事態を見据えて、党は1) 統一に要する多額の費用を、西ドイツの低所得層ではなく、高額所得層・企業に負担させ、また軍需予算の緊縮によって捻出する政策、2) 統一によって高まると予想される排外主義を見据えて、移民の政治的権利の強化ならびに文化的多様性の受容を促進するような政策の実現に向けた準備を進めるべきである、と彼女は主張していた<sup>64</sup>。

## 2-2. エコロジー的国家連合

上記の二つのプレス発表は、ドイツの再統一問題という極めてアクチュアルな問題に関して党内の足並みが乱れていることを、党外に向けて決定的に印象づけた。さらに党州支部からも発せられるこうした見解の乱立状況に終止符を打つべく<sup>65</sup>、党代表のフックスは、2月19日にドイツ統一に関する党の公式見解を発表する<sup>66</sup>。5時間に及ぶ激論の結果、党の中央委員会 (Hauptausschuß) において承認

62 Jürgen Maier: Grünes Chaos in der Deutschlandpolitik vom 8.2.1990: AGG, B.II.1/2325.

63 Nicht auf den fahrenden Zug aufspringen. Zu dem angeblichen Positionswechsel der Grünen in der Deutschlandpolitik erklärt Verena Krieger, Sprecherin im Bundesvorstand der Grünen vom 8.2.1990: AGG, B.II.1/2325.

64 Nicht auf den fahrenden Zug aufspringen: AGG, B.II.1/2325.

65 例えば原理派は、2月初頭の時点で二国家体制維持を表明していた。また現実派が主導権を握るヘッセン州支部は、二国家体制論の維持を「非現実的」とする一方で、ハンブルク州支部は二国家体制維持の決議を行っていた。„Bei den Grünen setzt sich die Ablehnung der deutschen Einheit durch“, in: FAZ vom 20.2.1990, S. 2; Wick: Die Mauer muss weg, S. 275.

66 „Bei den Grünen setzt sich die Ablehnung der deutschen Einheit durch“, in: FAZ vom 20.2.1990, S. 2; „Die Grünen setzen nun auf den konföderativen Weg“, in: Die Welt vom 20.2.1990; „Eine ökologische Konföderation tut not“, in: Frankfurter Rundschau vom 20.2.1990; Nowakowski, Gerd: „Grüne plädieren für Konföderationskurs“, in: taz vom 19.2.1990, S. 4.

された結論は、緑の党はドイツ統一に反対し、「両ドイツ国家の国家連合という立場を支持する。国家連合とは両国家の独自性を維持した形での協力と共同性を意味するものである」というものであった。しかしこの発表の別の箇所では「この国家連合が永続的なものであるか、それとも連邦制を採用する一つの国家へと発展していくのか、という点については現状において決定する必要はない」とも述べられており、両ドイツの完全な統一にも含みを持たせた表現がなされていた。こうした主張が、早期の統一を求める国民のナショナリズムの高まりの中でどの程度の反響を得るのか、極めて疑わしいかったが、ともかくこの声明により緑の党は、これまで主張を公式に変更した<sup>67</sup>。

この時点においてもなお、統一に無条件に賛成の立場を表明しない緑の党の姿勢は、しかしながらプレスからは「統一というドラマにおいて、とうの昔に主役の座を降り [...] 自らの信念に殉じることで歴史的瞬間を逃す」と揶揄されている状態であった<sup>68</sup>。

### 2-3. ハーゲン党大会（1990年3月30日/4月1日）：出発派・現実派の敗北

#### 2-3-1. 統一問題

すでに3月18日に行われていた東ドイツ人民議会（Volkskammer）選挙において、可能な

限り早急な統一を主張する選挙連合「ドイツのための連合（Allianz für Deutschland）」が48%の投票率を獲得した一方で、二国家体制の維持を主張してそれぞれ選挙活動を展開した「緑の党（Grüne Partei）」および「同盟90（Bündnis 90）」は、両者の得票率を合計しても4.9%にとどまった<sup>69</sup>。この選挙結果は、多くの西側の緑の党員にとって衝撃であったと同時に、二国家体制についてのこれまでの党内の議論を見直す最後の機会を提供した<sup>70</sup>。

こうした政治情勢の中で党内の各勢力が統一問題に対して示した姿勢は、それが自らの信念の正しさを確信しつつも、国民の多数派を獲得する展望の乏しさを理由にするものから、単に機会主義的な便乗によるものまでの違いはありながら、二国家体制論からの離脱競争の様相を呈した<sup>71</sup>。二国家体制論の維持を大会においても主張し続けたのはハンブルクを中心とする原理派のみであった。フィッシャーも党大会直前まで二国家体制論に固執していたが、党大会においては、それを批判する側に回っていた<sup>72</sup>。左派フォーラムも2月には従来の立場を放棄していたので<sup>73</sup>、左派としての共同戦線はもはや存在せず、「左派」としての提案は党大会の場では行われなかった。

「人民議会選挙結果は、東ドイツ国民の可能な限り早期の統一に向けた意思である」と

67 出発派のドイツ問題に対する姿勢は「国家連合」案であった。これに関しては以下を参照。Fücks, Ralf: Grünber Aufbruch, „Ökologische Konföderation beider deutscher Staaten. Gemeinsamkeit in Autonomie“, in: Grüner Basis-Dienst 1/1990, S. 26-27.

68 „Deutsch-deutsch statt rot-grün“, in: SZ vom 20.2.1990.

69 Bundeszentrale für Politische Bildung: „18. März 1990: Erste freie Volkskammerwahl“, in: [http://www.bpb.de/themen/01MOVB,0,0,18\\_M%E4rz\\_1990%3A\\_Erste\\_freie\\_Volkskammerwahl.html](http://www.bpb.de/themen/01MOVB,0,0,18_M%E4rz_1990%3A_Erste_freie_Volkskammerwahl.html)

70 Wick: Die Mauer muss weg, S. 276.

71 Wick: Die Mauer muss weg, S. 277f.

72 Volmer: Die Grünen, S. 293.

73 „Unsere Position ist völlig bedeutungslos“, in: taz vom 7.2.1990, S. 22. またベルリン AL が二国家体制論の放棄を決議したのは、3月末であった。Reinecke: Ströbele, S. 341.

いう現実派・出発派連合による二国家体制放棄の提案が、左派フォーラムの支持も得て採択された<sup>74</sup>。こうしてようやく4月になって緑の党は党内の意見を統一支持で集約することになる。

### 2-3-2. SED-PDS との関係

この党大会においてより深刻であったのは「エコロジー的市民政党」への党の方針転換の問題であった。前述のように、現実派・出発派は1990年の連邦議会選挙に向けた選挙プログラム案として「エコロジー・マニフェスト (ökologisches Manifest)」を作成しており、そこでは「環境政策の優位」を打ち出すことによって、党内から左派色を一掃することを目指していた。現実派・出発派は、SED体制の評価とその後継政党としての民主社会党 (Partei des Demokratischen Sozialismus: PDS) と緑の党の関係のあり方に議論の焦点を当てることで左派を劣勢に追い込み、これを機会に党内で主導権を握ろうとする。

現実派のホスは、スターリン主義、SED独裁体制、人権侵害、社会主義、そして緑の党内左派との「親和性」を指摘し、それら全てを同列に置いて非難するという論法を党大会において展開する。この論法に従うならば、自らが「スターリン主義者」ではないことを証明するには、自らが党内左派勢力であることを否定する以外の選択肢はあり得なかった。さらにホスは、東ドイツの人権擁護運動との共同歩調を目指すならば、緑の党が自らの性格付けの概念としての「左派」を最終的に放棄することを要求した<sup>75</sup>。

現実派・出発派連合は、こうした冷戦に「勝利」したという高揚感とともに統一前後にドイツ社会に吹き荒れた、あらゆる左派的な理念とSED独裁体制との連続性・親和性を強調しながら断罪するという雰囲気を共有しつつ、また意識的にこれを利用しながら、左派フォーラムを中心とする党内左派の影響力を排除しようとした。

党大会での議論に際して出発派・現実派は、彼らの目標が党の新たなアイデンティティ (= エコロジー) の確立であり、決して党からの左派の追放ではないことを強調していた。しかしながら「エコロジーという理念を、社会主義という沈みつつある船にいつまでも縛り付けておくことは許されない」(フックス) といった、出発派からこれまで再三にわたって発せられてきた発言は、左派を自認する党員の不信を駆り立てるに充分であった<sup>76</sup>。結果的に出発派・現実派の主張は、左派の激しい反発を引き起こすことになり、党大会は紛糾する<sup>77</sup>。

他方、左派フォーラム内にくすぶっていた方針の相違も、PDSが、統一ドイツにおける政治勢力として大きな意味を持つ可能性が現実味を帯びてくるにつれて明確化してきた。L. フォルマーら左派フォーラムの大勢は、PDSとの協力を明確に否定することが、党の分裂回避とその政治生命の維持にとって決定的であると考えていたが、まさにその瞬間にレーンツは、インタビューの中でPDSとの協力の可能性を示唆する発言を行う<sup>78</sup>。このレーンツの独走に対してフォルマーは、この発言が左派フォーラムとしての公式見解ではない

74 Bannas, Günter: „Resigniert nicht, arbeitet weiter!“, in: FAZ vom 2.4.1990, S. 4; Die Grünen: Außerordentliche Bundesversammlung, Hagen (30.3. bis 1.4.1990). Anträge, AGG, B.I.1/1384; Wick: Die Mauer muss weg, S. 278.

75 Volmer: Die Grünen, S. 293.

76 Nowakowski, Gerd: „Von Spaltung spricht keiner bei den Grünen“, in: taz vom 29.3.1990, S. 6.

77 Volmer: Die Grünen, S. 294.

という声明を出すとともに、レーンツ、ミヒャエル・シュタム (Stamm, Michael) らを左派フォーラムから除名した。

左派フォーラムはこうした足並みの乱れを示しながらも、現実・出発派による党のエコロジー的市民政党への転換の試みに対しては、結束して対抗案を提示する。またこの行動には、現実派に属すと考えられながらも一部独自の行動をとるようになっていた批判的現実派 (kritische Realos) と呼ばれる勢力も合流した。その対抗案の骨子は、PDS との協力は拒否するが、「社会主義的な理念が持つ人道主義的内容と資本主義批判が持つ建設的な価値を緑の党は維持するべきである」というものであった<sup>79</sup>。

党大会の決議では、PDS との協力反対の方針自体は大差で可決されたが、現実派・出発派連合によるエコロジー的市民政党化への試みも僅差で否決された。また連邦議会選挙向けプログラムの前文についても、現実派・出発派による提案は否決された。採択されたのはデイトフルトらのラディカル・エコロジストも賛成に回った左派フォーラムの提案であり、またプログラム前文に関しても、左派フォーラムが起草したブラウンシュヴァイク支部案であった<sup>80</sup>。

緑の党は結党当初から「右でも左でもなく前へ」をスローガンに、エコロジー問題を典型とした、既存の政治的枠組みが扱ってこなかった社会問題を政治問題化することに成功してきた。エコロジー問題を前面に打ち出す出発派の試みは、ポスト成長至上主義社会ないしシステム社会の成立を意識した、左右の対抗軸に収斂しないポスト近代主義政党とし

ての緑の党という存在の実現の可能性を一方で秘めていた。他方、こうした彼らの訴えかけは、その実現のためには時期・対象そして方法といった点であまりに大きな問題を抱えていた。

時期という点について言えば、彼らは現存社会主義が次々と崩壊し始めた 1980 年代末の状況の中で、党の性格の再定義を試みたことは大きな問題であった。社会主義理念一般を全否定し、資本主義の全面的勝利という高揚感の中で出発派が、党の左派色の一掃を試みたことを、現実社会主義とは区別される「理念」としての社会主義を信奉する党左派大衆は、自己の政治的アイデンティの否定、または緑の党の資本主義への全面降伏と受け止めた。さらにそれが党内左派大衆の「誤解」と片付けられない発言が現実派・出発派の側からなされる時、彼らの反発は激しいものとなった。

また出発派・現実派によるポスト近代主義政党路線は、左派に「緑の自由民主党化」ないし「ヤッピー政党化」と揶揄されるように、あまりに「市民」政党化(=富裕中間層向け政党)の傾向が強かった。確かに西ドイツ社会は、第三次産業の進展に伴う伝統的な階級構造の解体傾向を顕著に示していたし、まさにその産業セクターから過剰代表的に党员そして支持者を獲得してきたのが緑の党であった。しかしながらこうした産業構造の転換は、都市部を中心とした住宅問題の深刻化といった社会問題を解決しなかったし、また新たなタイプの貧困を生み出してすらいた。こうした「社会問題」に対して最も敏感な層は、主として都市部に居住する第三次産業従事者

78 „Grüne: Von der Abspaltung zur Spaltung?“, in: taz vom 13.3.1990, S. 4; Volmer: Die Grünen, S. 294.

79 Volmer: Die Grünen, S. 294.

80 Beschluß der Grünen zur Bündnispolitik mit DDR-Gruppen vom 30.3.1990, S. 7; „Zerstritten gehen die Grünen in die Wahlkämpfe dieses Jahres“, in: FAZ vom 2.4.1990, S. 4; Schmale, Holger: „Die Grünen bleiben links“, in: taz vom 2.4.1990, S. 2; Volmer: Die Grünen, S. 295; Wick: Die Mauer muss weg, S. 278.



(ないしその予備軍としての学生)の中に存在しており、彼らは緑の党がこの「社会問題」に最も真剣に取り組む政党であるからこそこれに入党し、また支持していたのであった<sup>81</sup>。彼らが「社会主義という理想を完全に断念することを望まない」のは、出発派のフックスが言うように、彼らが「19世紀的な思考の枠組みの奴隷」であるからではなく、資本主義的システムは、こうした社会問題に無関心であり「何らかの形の」社会主義こそがこれを解決するという期待を持っていたからであった<sup>82</sup>。さらに緑の党のみがその可能性を真剣に模索してきた政党であり、また西ドイツ政治空間において「エコロジー政策と社会政策の同盟のみが党の生き残りにとって決定的」であることを理解しているからであった<sup>83</sup>。

こうして当時党内で絶大なる人気を博していたフィッシャーの悲痛な呼びかけにもかかわらず、現実派・出発派連合による党内主導権確保の試みは失敗に終わった<sup>84</sup>。その結果、

出発派はその後徐々に派閥としての求心力を失っていく。また前述の人民議会選挙の結果から明らかになったように、出発派が同盟相手として構想していた人権・市民運動グループは、予想されたほどには東ドイツ社会に影響力を持っていなかった<sup>85</sup>。こうした事態も彼らの影響力低下に拍車をかけることになった<sup>86</sup>。さらに左派に対する出発派のこうした頑強な決別路線は、現実派からの反発も引き起こした<sup>87</sup>。A. フォルマーは「血と土の思想(Blut und Boden Denken)」を信奉しており、現実派である我々よりもはるかに右に位置している、といったフィッシャーの批判はその一例であった<sup>88</sup>。こうして出発派と現実派の連合は事実上崩壊し、次の党大会では、エコロジー・マニフェストを提案しないことが両者の間で合意されていた<sup>89</sup>。

---

81 Volmer, Ludger usw., „Schutt wegräumen“ vom 17.6.1988: AGG, G.01-FU Berlin, Spezialarchiv „Die Grünen“/Nr. 58. この左派フォーラムが作成した文書の中で、自らを古典的な意味での左派政党ではないものの、ゴデスベルク綱領以降、社会民主党が切り捨てた左派を吸収した政党であると自認していた。

82 „Ausbrechen aus den Denk-Gefängnissen“, in: taz vom 2.4.1990, S. 3.

83 Nowakowski, Gerd: „Von Spaltung spricht keiner bei den Grünen“, in: taz vom 29.3.1990, S. 6; Volmer, „Schutt wegräumen“: AGG, G.01-FU Berlin, Spezialarchiv „Die Grünen“/Nr. 58. 左派フォーラムがメンバーを募ったこの文書の中で、緑の党を「エコロジー資本主義的なヤッピー政党」に変質させることを望まないという明確な意思表示がなされていた。

84 Volmer: Die Grünen, S. 296.

85 Wick: Die Mauer muss weg, S. 277.

86 Nowakowski, Gerd: „Grüner Aufbruch - Im Parteiapparat versandet?“, in: taz vom 26.11.1990, S. 5. 出発派の主導による「党内和解」の試みは「党内左派に対する妥協のない対決路線を通して、これまで経験しなかった次元での党分裂の危機を引き起こすことになった」と taz 紙は総括していた。

87 Hoffmann: Die doppelte Vereinigung, S. 82f. ホフマンは出発派が急速に解体傾向を示した原因として、彼らが元来党基礎との接点が薄い集団であった点を指摘している。さらに彼は、現実派の「左派的価値」への同調の側面を強調しており、エコリパタリアンや出発派と異なる点に注意を促している。この点については、S. 85; „Grüne: Völlig irre“, in: Der Spiegel, 16/1990, S. 41-47.

88 Volmer: Die Grünen S. 296. L. フォルマーは、フックスが左派フォーラムに対して 共闘を申し出てきたが、拒否したと回想している。

### 3. 離党者の続出

ハーゲン党大会での党の分裂は、結果的に回避された。しかしながら分裂ではなく、党の「瓦解」とも見える現象が進行していく。党で指導的な役割を担ってきた人物の相次ぐ離党である。

カールスルーエおよびデュイスブルク党大会以来、党内で影響力を失っていたトランペルト、エーバーマン、シュミット、レグラ・シュミット＝ボット (Schmidt-Bott, Regula) らの原理派の指導的人物は、ハーゲン党大会終了直後に彼らを支持する 40 名以上の黨員と

もに、緑の党を離党し、「急進左翼 (Radikale Linke)」を結成した<sup>90</sup>。

こうした原理派の離党は、カールスルーエおよびデュイスブルク党大会で生じた左派内部での共同戦線の崩壊の帰結と言えた。しかしながら一見すると党内闘争の勝者に見える現実派からもこの時期離党者が続出した。現実派の最も主要な人物であったシリーはすでに 1989 年 11 月の時点で離党し社会民主党に移籍していたが<sup>91</sup>、この時期ハンブルク現実派の指導的人物であったテア・ボック (Bock, Thea) も離党し、同じく社会民主党に移籍していた<sup>92</sup>。

89 Nowakowski, Gerd: „Bündnis von Realos und ‚Aufbruch‘ zerbricht“ in: taz vom 9.4.1990, S. 4. ただし出発派・現実派は、PDS の台頭を前に、社会民主党の左側に 2 つの政党は共存できないとして、緑の党の「エコロジ的市民政党」化の必要性をその後も主張し続けていた。これに関しては以下を参照。„Grüne: Völlig irre“, in: Der Spiegel, 16/1990, S. 41-47; Nowakowski, Gerd: „Wir sind und bleiben eine Oppositionspartei“, in: taz vom 21.9.1990, S. 7.

90 Bannas, Günter: „Traberfreunde der grünen Seele. Ebermann und Trampert verlassen die Grünen“, in: FAZ vom 7.4.1990, S. 4; „Grüne: Völlig irre“, in: Der Spiegel, 16/1990, S. 41-47; Volmer: Die Grünen, S. 296; Veen: Die Grünen zu Beginn der neunziger Jahre, S. 142.

91 1987 年末からの党内の勢力配置の急激な変化は、それまでウルトラ・レアロと揶揄されながら現実派内で主要な地位を占めていたシリーにとっても自らのキャリアの上で大きな転機となった。左派フォーラムに集結した党内左派が社会民主党との連立容認に公式に乗り出したことは、これまで左派が自発的に距離をとってきたことによって現実派が占めてきた議員・閣僚ポストの確保が今後安泰なものではなくなることを意味した。こうした状況の変化に機敏なシリーはすでに 1987 年 12 月の危機対応会議に際してすでに離党の可能性について発言していた。さらに 1989 年 1 月の連邦議会議員団代表選に際しての左派フォーラムの自らに対する反発の強さを認識させられた時、そして自ら主導権を握りながら党綱領からの「社会政策」部分を大幅に縮小する試みが失敗に終わった時、そして直接的には自らの選挙母体であるノルトライン・ヴェストファーレン州支部がローテーション制の維持を党大会で確認した時、緑の党を見捨てる決断をする。こうしてシリーは 1989 年 11 月 2 日に社会民主党への移籍を発表し、その後当選確実な選挙区を同党から提供された。Worschner, Klaus: „Auf der Suche nach der grünen Utopie. Aufmarsch der Landesverbände gegen das ‚Affentheater in Bonn‘“, in: taz vom 14.12.1987, S. 3; „Rotation in den grünen Landesverbänden. Wie es euch gefällt“, in: taz vom 3.11.1989, S. 14; Nowakowski, Gerd: „Otto Schily geht zur SPD“, in: taz vom 1.11.1989, S. 1f.; Bannas, Günter: „Schilys Wechsel zur SPD hat sich angekündigt“, in: FAZ vom 1.11.1989, S. 4; Volmer: Die Grünen, S. 291.

92 „Grüne: Völlig irre“, in: Der Spiegel, 16/1990, S. 41-47; „Haßerfülltes, menschenverachtendes Klima. Thea Bock über die Gründe ihres Austritts aus der Hamburger Grün-Alternativen Liste (GAL)“, in: Der Spiegel, 50/1988, S. 40-41.

さらに前述のように PDS と距離を置くという方針は、左派フォーラムの支持も得て、ハーゲン党大会において党の公式の方針として確認されていたが、この方針は、左派フォーラムに属しつつも PDS に共感を示していたレーンツ、シュタム、ヴォルフ、クリーガー、アルケンシュテッテそしてディルク・シュナイダー (Dirk Schneider) らにとって自らの政治活動の拠点を移す決心をさせるに十分であった。彼らは 9 月に離党してその一部は実際に PDS に合流していった<sup>93</sup>。ディトフルトは党に残ったが、彼女の伴侶であるマンフレッド・ツィーラン (Zieran, Manfred) とともに PDS への公然たる支持を隠そうとしなかった。その彼女も 1991 年 4 月に離党する<sup>94</sup>。

政策面での意見の違いは大きかったものの、左派フォーラムにとってベルリン AL を中心とした離党者の続出は痛手であった。とりわけ党内左派の影響力の排除とも言える政策を出発派が強行する状況下で事態を静観することは、出発派を利するだけでなく、さらなる党員の PDS への流出を引き起こす可能性があった。そこで左派フォーラムのメンバーであり党執行部に属していたマイアーは、離党に対して党として公式に「遺憾の意」を表する必要性を訴える<sup>95</sup>。さらに離党が、とりわけ左派フォーラムに対して与える影響に危機感を持っていたマイアーは、党執行部の決

議を待たず、L. フォルマーとともに派閥としての声明を出していた<sup>96</sup>。

またこうした正式の離党行動とは異なるが、やはり党の瓦解と呼べるような現象がこの数ヶ月間の間に静かに進行していた。それは連邦議会議員の議員団会議への異常ともいえる欠席率の高さによって表面化していた。41 名の党連邦議会議員によって構成される議員団会議は、この数ヶ月間は出席者が 10 名を下回る状況で開催されることが珍しくなかった<sup>97</sup>。その背後には、党州支部や党中央がそれぞれ制定していたローテーション・兼職禁止規定によって、1990 年の選挙に再立候補が可能な議員が極めてわずかであり、党内規約上、(再)立候補が不可能な人物の中に、党のこれまでの活動を支えてきたケリー、ニッケルス、そしてこの時点での党代表であったホス、A. フォルマーなどが含まれたという事情があった<sup>98</sup>。

#### 4. ドルトムント党大会 (199 年 6 月 8/10 日) : バイロイト党大会 (9 月 22/23 日)

統一ドイツ後の最初の連邦議会選挙を直前に控え、選挙に向けた準備不足を懸念する声、とりわけ統一問題に対する明確な方向性を提

93 Veen: Die Grünen zu Beginn der neunziger Jahre, S. 141; Volmer: Die Grünen, S. 296; Wick: Die Mauer muss weg, S. 277.

94 ディトフルトはすでに 1989 年末の段階で、緑の党の左側に存在する政治空間の大きさについて言及し、東ドイツの政治状況の展開如何によっては、党内からこの空間に向かって移行していく勢力が少なからずいるであろうことを指摘していた。Ditfurth, Jutta: „... dann ist die Partei kaputt“, in: Schroeren, Michael (Hg.): Die Grünen: 10 bewegte Jahre, Wien 1990, S. 222-233. hier S. 231.

95 Austritte bzw. Übertritte von Mitgliedern der Grünen zur PDS: Antrag zur Bundesvorstand-Sitzungen am 11.9.1990 vom 7.9.1990: AGG, A-Bartelheimer, Peter /40.

96 Pressemitteilung zum Austritt führender Mitglieder der AL vom 10.9.1990: AGG, A-Peter Bartelheimer/40.

97 Nowakowski, Gerd: „Grüner Aufbruch - Im Parteiapparat versandet?“, in: taz vom 26.11.1990, S. 5.

98 Nowakowski, Gerd: „Viel Sprengkraft in der neuen Fraktion“, in: taz vom 29.11.1990, S. 6.

示できないでいる党の状況に危機感を抱く声は派閥を越えて強まっていた。さらに前述のような党の瓦解傾向を前に、左派からフリーダー・ヴォルフ (Wolf, Frieder Otto)、L. フォルマー、中間派からクリスタ・フェンネゲルツ (Vennegerts, Christa)、現実派よりフベルト・クラインルト (Kleinert, Hubert) らの働きかけにより選挙に向けた派閥間の調停が図られた<sup>99</sup>。その結果ドルトムント党大会は、ハーゲンの再現とはならなかった。出発派は「エコロジー・マニフェスト」をもはや党大会の決議案としては提出せず、これを「その他」の議題として党の今後の長期的な議論の題材として扱うにとどめるという提案を受け入れた<sup>100</sup>。決議されたのは、党執行部提案である「我々緑の党员にとってエコロジー、民主主義そして社会的公正は不可分のものである」という文面が入った「気候変動 行動への呼びかけ (Klimakatastrophe - Aufruf zum Handeln)」であった。またドイツ政策に関しては、東ドイツの西ドイツへの吸収合併を意味する現在の国家条約案に反対し、「よりソフトなドイツ統一への道」を主張することが決定された<sup>101</sup>。

それに対して党執行部選挙はやや異なった様相を呈した。ベルリンでの赤・緑連立政権の成立により、党内で統合の象徴と見なされるようになっていた左派フォーラムのシュトレーベレが、同じく左派フォーラムのダムス、批判的現実派のリュールと並んで党代表に選出された。書記に選出されたエルケ・キルト

(Kiltz, Elke) (彼女は原理派のマノン・トゥックフェルド (Tuckfeld, Manon) を破って選出されていた) を加えると、党執行部は穏健左派によって独占されることになった<sup>102</sup>。出発派のフックスは、シュトレーベレと競合したが、選出されなかった。現実派・出発派はこうして党執行部から姿を消すことになった<sup>103</sup>。

続く9月末のバイロイト党大会においてようやく連邦議会選挙に向けたプログラムを決定するが、それはあまりにも遅きに失した感があった。またその内容は「ドイツ中の皆がドイツ統一について語っている時に、我々は天気について語っている」とL. フォルマーが自嘲するように、「環境の優位」に固執する現実派・出発派とドイツ問題を議論することに消極的な左派フォーラムとの寄り合い所帯の実情がはっきりと見えていた<sup>104</sup>。こうして党は国家の統一プロセスというこの時点での最大の問題に関して、基本的な原則を打ち出すことなく連邦議会選挙を迎える。その結果は、前回1987年の選挙と比較した時、得票数で45.3% (約140万票) の減少であった。西側選挙区 (旧連邦共和国) での総得票率は4.8%で、ドイツの選挙制度が定めるいわゆる5%条項により、緑の党は連邦議会での議席を全て失うことになった。この壊滅的な選挙結果を受けて、党はようやく根本的な再編に着手していくことになる。

(なかた・じゅん 本学部教授)

99 Vein: Die Grünen zu Beginn der neunziger Jahre, S. 57; Vollmer, Antje: „Versuch, sich der eigenen Partei verständlich zu machen“, in: taz vom 25.4.1990, S. 13; Volmer: Die Grünen, S. 297.

100 Nowakowski, Gerd: „Fundamental-opportunistisch gegen Krise“, in: taz vom 8.6.1990, S. 5.

101 Raschke, Joachim: Die Grünen. Wie sie wurden, was sie sind, Köln 1993, S. 921.

102 „Grüne treten auf der Stelle“, in: taz vom 13.6.1990, S. 4; Nowakowski, Gerd: „Gemischte Gefühligkeit der Grünen. Bundesdelegiertenkonferenz der Grünen in Dortmund. Die Partei hat ihre Krise noch nicht überwunden“, in: taz vom 11.6.1990, S. 3; Volmer: Die Grünen, S. 297.

103 Raschke: Die Grünen, S. 922.

104 Volmer: Die Grünen, S. 298.